

クラス会（4クラス会）

全国のクラス会のご紹介です。毎年たくさんのクラス会が催され、ご寄稿いただいています。紙面の都合上、写真は1枚、原稿は800字までとさせていただきます。何卒ご協力のほどお願い致します。

1 畜産科クラス会 （昭和43年3月卒業）

創立100周年誠にありがとうございます。クラス会を行ったので報告をいたします。

世の中新型コロナを中心としたお騒がせが長く続き、人々の行動が制約されてきました。特に集会や宿泊等の人の集まりが危険とされ、観光業界などは大変でした。そのため毎年開催を続けてきた我々昭和43年卒業の畜産科クラス会もやむなく3年中断してきました。そして今年思い切って群馬県の川原湯温泉「丸木屋」旅館において12月10日～11日で開催しました。健康上の理由で参加できない者が多く、結局23名中6名の参加者となりましたが決行しました。積もる話も沢山あり、また小原くんからクラスメイトの情報や宇大の近況などがもたらされて夜遅くまで盛り上がり、久しぶりの再会は喜びが最高潮に達し成功裏に終わりました。懇親会の写真をお送りしますのでよろしく願います。写真は左から片貝勝、関昌弘、佐藤隆、石崎忠道、川西直樹、小原貴の各氏です。会報への掲載を



よろしくお願い致します。

尚、この度同窓会長になられた宇田さんは学生時代管弦楽団と一緒に活動していたことがあり、昔が懐かしく思い出されました。どうぞ同窓会運営にご活躍ください。期待しております。

また、私事で恐縮ですが片貝勝は昨年秋の瑞宝章受章を受章いたしましたのでご報告申し上げます。

（文責：片貝 勝）

2 燦久会・3年半ぶりに米沢で集う （昭和39年3月卒業）

新型コロナウイルス禍が落ち着いたのを見計らい、令和5年6月22日に60年前に農業経済学科を出た面々11人が米沢に集った。昭和39年に卒業した者一人ひとりがつまでも光り輝くようにと燦久会と称し、平成12年【2000年】以来20年間休むことなく、少ない時でも4割方の出席を得て続けられてきた。それが、突然のCOVID=19の出現で、「未来も移動の自由も議論も奪う」（カミュ著『ペスト』岩波文庫版60頁）状況に陥り、ここ3年半の間、開催を見合わせ、この度ようやく21回目の開催となった。

仙台の佐々木が山形の私の車に同乗し一緒に米沢に向かう、皆の集合場所としていた米沢駅西口の駐車場に着いたその時、さいたま市の鈴木正が車で着く。3人で駅に向かい待つ間もなく、つばさ129号が到着、鈴木吉郎、小林、永井、熊倉、森山、篠塚、関谷、しばらくして成瀬が現れ、参加者全員が揃う。マスクをしている者はごく僅か、互いに握手を交わし再開を喜び合う。

まずは移動し、上杉伯爵邸で昼食。今の伯爵邸は、大正14年に中條精一郎により設計され再建されたもの。その一室で、米沢牛付きの「花の膳」とその日の朝山形の直売所で調達した、さくらんぼ「紅王」20粒を食す。

このあと、伊藤忠太設計の上杉神社や鷹山精神を表す「民の父母」、「為せば成る」の碑等米沢城址を巡り、伝国の杜（米沢市博物館）を観たのち、東光の酒蔵、そして上杉家



廟所へ行く。ここでも城址とは別のグループの地元ガイドにお世話になるも、同じく、先人への敬愛、郷土への誇りが感じられる説明で、心に残った。



宿の白布高湯温泉東屋ではゆっくり温泉につかったのち、マスクなしで会食。去る3月に逝去された二瓶君のご冥福を祈り皆で黙禱を捧げる。しばらくして恒例の各人からの話に。これが際限なく会場を移し、6時間余、翌日まで渡り続いた。学生時代の他愛のない思い出話も混じるが、権威主義がはびこる国際情勢の話やら母校への愛を込めた思いや期待、励んでいる農作業の苦勞話、これまで闘ってきた自身の病歴、ベターハーフのケア、また高齢社会真っ

ただ中の地域でリーダー役を担わざるを得ない実情など直面している深刻な話まで実に多様な内容に及んだ。

翌朝9時に宿を出、初めてという人が多かったさくらんぼ狩りを楽しみ、産業振興にも寄与した直江石堤、鷹山終生の師細井平洲を出迎えたといわれる普門院を訪れる。そして笹野「ならで」でそばとかいもちをとり、次回は関東で再開することを誓い合い米沢駅で2時前に解散した。

久方ぶりに旧交を温め、米沢の人、自然、歴史文化に触れ、何か張り合いや力になるものを感じた思い出深い旅となったのであれば幸いである。いつまでも輝き光っていてほしい燦久会である。

最後に、このたび参加が叶わなかった、ご家族を含め多くの方々からメッセージやお心遣いを頂きました。深く感謝申し上げます。(文責：横山)

3 農学科第20回生群馬県伊香保に集う クラス会 (昭和47年3月卒業)

これまで通常毎年開催してきた私たちのクラス会は、2019年10月に茨城県の筑波山で開催して以来、4年振りの開催となりました。

新型コロナの蔓延で延び延びになっていましたが、メンバーから催促が来るようになったことや、この伝染病の格付けが下がったことなどから、今回の幹事である群馬県のメンバーが集まり、コロナ感染のリスクを背負いながらの開催を決めました。

クラス会は、2023年5月22日(月)に、群馬県伊香保温泉の森秋旅館で開催しました。

時節柄や、毎年一つずつ年を重ねてきて体調不良のメンバーが出たりして、総勢18名と、これまでと比べるとちょっと少ない参加者となりました。

受付時間より早く到着した人は、伊香保名物の365段の石段を往復したり、メンバーとの会話を楽しんだり、開会前からクラス会が始まっていたようでした。

夜の懇親会は、乾杯で始まり、幹事長の歓迎挨拶、各メ



ンバーからの近況報告とお決まりの行事が終わると、その後はお開きまでゆっくりと久々の会話や飲み会が進みました。元気の残っている人たちは幹事部屋で夜中まで酒や会話を楽しみました。

翌日は、朝食後解散し、またの再会を誓いながら、それぞれのルートで観光したり帰宅したりということになりました。

次回のクラス会は栃木県が快く幹事を引き受けてくれ、宇都宮で開催される見込みです。

ぜひ多くのメンバーが参加出来ることを願っています。(文責：松井 剛)

4 林学科7回生 クラス会 (昭和34年3月卒業)

日 時：2022年11月3日(木曜日) 16時～

場 所：宇都宮市(ホテルニューイタヤ)

参加者：11名

母校を巣立って63年。その間に平成14年のカナダ旅行を含め、35回ほど宿泊旅行や作品展示会などの行事を行ってきた、我ら新林第7回卒の七林会である。

コロナ禍のため、最近の2年間は中断したものの、今年、令和4年の秋もまた宇都宮で楽しい誇らしい一夜を過ごすことができた。

翌朝は市役所の16階から眼下の宇都宮城址をはじめ、筑波山の方に広がる雄大な市街の展望を満喫し、市勢の発展ぶりに驚嘆した。

母校に移って森林学科の大久保達弘教授の懇切なご案内により、思い出深い校内の建物や施設を一巡したが、いずれも数十年間の発展ぶりに目覚ましく、感慨無量のものがあった。

母校の構内で、とりわけ印象深かったのは、旧講堂の一室に飾られた数々の写真に接したときである。旧校舎や寮舎、農場、新入生歓迎ファイヤーストームでの裸踊りなど、



どの1枚を見ても遠く過ぎ去った青春の思い出が詰まっていた。昔変わらぬフランス式庭園や、巨木と化した数々の樹木なども懐旧の念をかき立てた。

残念ながら令和4年をもって解散となった七林会ではあるが、残金は母校の3C基金に宛てることにし、手続きを済ませてから、後髪をひかれる思いで校門を後にした。

駅前では名物のギョウザ店に入り、昔はピーナッツバター塗りのコッペパンをよく食べたものなどと語り合いながら昼食を済ませ、来年また、農学部100年祭で会おうと、鬼がわらうような言葉を交わしながら、名残りおしさを振り切って、それぞれの帰路についた。(文責：館)